

# 生活綴方における子どもの文章表現の研究

岡 屋 昭 雄

## 〔抄 録〕

今回の論文は、子どもの側から捉えた綴方の問題点を考察し、検討することを目的とし、子ども達が自分たちの何に問題意識を持ち、何をどのように表現するのかを、主たる研究の狙いとするものである。

今迄は、とかく教える教師の立場からの綴方実践が論じられることが多かった。子ども達の表現する意欲の減退が語られ子どもの生活が見えなくなっている現状をも視野に入れて、子ども達が主体的、且つ自主的に書く主体を形成するプロセスを明らかに出来たらとも考量している。

したがって、子どもの成長・発達を踏まえた綴方の実践が求め

られることは当然であろうが、子どもが、あるいは子どもの達が自己の生活や環境（小さくは家庭生活、遊びの生活、生活空間の拡がり）を通して環境によって規制されつつ、環境を変えていく営為をも視野に入れて考察すべきであろう。

綴方の実践を支援・援助・組織する教師は、子どもの生活の背景を正確周到に把握する必要があることにも言及する。

キーワード 身体的認識、環境と人間、生活の凝視、仲間づくり、人間理解

## はじめに

筆者は、小学校の教師時代、作文教育の実践には熱心であった、と

自負している。それでもよく子ども達から「作文はどうして書かなければならないの」と質問されると返答に窮する場合が屢々であった。「みんなが人間としての生き方を作り出すためにするんだよ。」といっても子ども達は、きょとんとするばかりである。それが日記指導とも

なると、「一日の生活の大切なことを記録し、よいことはさらに発展させ、悪いこと反省して改め、明日からの生活をよくしていくため」である、という子ども達は納得してくれていた。

今回は、北海道亀田郡大野町大野小学校の校長であった木村文助の指導した綴方作品を手がかりにして子ども達はどのように書く生活を構築したのか、さらには、子ども達を書く意味・価値をどのように獲得したかが重要な課題となるであろう。さらには、表現することの意味・価値が分かるためには、具体的な綴方を書く活動・営為を通して理解する必要があるであろう。わけでも、生活が見えなくなっている現在の子どもの置かれている状況をも切り開くためにも作文・綴方教育の必要性は以前にも増して重要となるであろう。

今回の使用する資料として、『綴方生活 村の子供』（文園社 昭和二年四月十日）と、『村の綴り方』（厚生閣書店 昭和四年十二月十五日）の二冊を第一次資料とする。さらには、『村落児童文選』（文園社 昭和五年四月廿五日）、砂原小学校児童共同作「漁村職業の全貌」（砂原小学校発行 昭和九年三月版）を第二次資料とする。

## 一、木村文助の綴方実践の全貌

畠山義郎著『村の綴り方——木村文助の生涯——』（無明舎出版 二〇〇一年七月）を紹介して下さったのは、大野町文化財保護研究会会長の木下寿実夫氏であった。早速に買い求めさせて頂く。畠山は次のように木村文助の業績について次のように述べる。

木村文助は、トルストイの作品を読み、その影響で一九一四年（大正三）には東京郊外の徳富蘆花を訪ね、「蘆花先生を訪うの記」を秋田魁新報に掲載している。

生後間もなく母と死別した木村文助は、叔父夫婦に引き取られて愛情に敏感な子ども時代を育ち、教師としても児童の教育を深く考察し、つまるところ、綴り方教育を柱に実践しようとあためたためいたものを、真中小（文助は秋田師範学校を卒業して、下川沿村（現大館市）川口小学校釈迦内（現大館市）大館女子（現大館市）阿仁合（現阿仁町）真中（現大館市）、前田（現森吉町）の各尋常高等小学校に勤務、真中、前田では、新進気鋭の校長であった。筆者注）で校長として学校経営を任せられ、より計画的な実践に入っていた。

函館で和田（一九一七年〈大正六年〉）北海道拓殖教育のため函館師範学校が開設され、初代校長に秋田県鷹巣町出身の和田喜八郎が任命されている。文助は秋田師範時代の恩師に当たる。筆者注）から事務長の辞令をもらったが、彼は、自分は和田先生の膝下で現場教師をするつもりで来たとして、一年我慢し、翌一九一八年（大正七年）七月三十一日、水を得た魚のように、亀田郡大野小学校長（五級俸、五十円）に就任した。期せずして、この年の七月七日、鈴木三重吉（二十七歳）が児童月刊誌「赤い鳥」を創刊した。木村文助が本格的な綴り方教育の実践をしつつ、この「赤い鳥」に秀れた児童作品を投稿してゆくわけである。<sup>①</sup>

つまり、ここでは、木村文助が北海道の小学校の校長として赴任する

理由とその生い立ちが重要となる。「生後間もなく母と死別した木村文助は、叔父夫婦に引き取られて愛情に敏感な子ども時代を育ち、」の表現から何を讀みとるかが重要であろう。筆者も幼い頃、母親を失い、父親の本家に預けられた経験がある。文助も、性格的に他人に甘えることが出来なく、母性的な愛情に飢え、独断先行的な行動が見られるところもある。その上に、他人と相談して決定する余裕がないことにもなる。したがって、前掲の「母と死別」は、文助の人格形成に重要な影響を与える。

## 二、木村文助の綴方実践の具体的方途

木村文助の最初の綴方の著書『綴方生活 村の子供』（文園社 昭和二年）の鈴木三重吉、田中豊太郎、木村文助の序文の重要な箇所を次に紹介する。

鈴木三重吉は、その序文に次のように述べる。

……私の意味づけた綴方なるものは、従来の教育家たちが考へてゐたやうな単なる『実用的の教課』でもなく、又古来の定型的な、趣味からの『文章の稽古』といふ如き生ぬるい技巧の修得でもなく、徹底した、児童の純芸術的創作としての価値を誇るもので、つまりは、児童の、はつらつとした純真な感覚、妥協を知らざる生地のまゝの批判、本当に物におどろき、怖れ、喜び怒り、愛し悲しむ純感情を保育するための教課である、約言すれば人格の根本を形づくる正しい理知と、人間味のうるほいとを保護開発するための教育そのもの

である。

正当な用意ふかき指導のもとにある限り、綴方の創作は児童に取つては、ことそのものが多大の愉悅でなければならない、この創作的感激は、やがて年長となるにつれて、僅かに限られた人のみの浸触し得る特種の情味である以上、せめて児童のときだけは、たれも揃つて味得させておくことが絶対に必要である。その感激そのものさへ、直ちに或うるはしい道徳的感情の基礎ともなつて残留し得るからである、児童の生活の記録であると見なす見解も、その価値上の論拠は一つにこの点にあらねばならない。

つまり、鈴木三重吉は、「実用的の教課」でも「文章の稽古」でもなく、それを脱皮し、「児童の、はつらつとした純真な感覚、妥協を知らざる生地のまゝの批判、本当に物におどろき、怖れ、喜び怒り、愛し悲しむ純感情を保育するための教課である。」と誇らしげに、且つ大胆に述べる。そして、綴方の究極の目的・目標は、「人格の根本を形づくる正しい理知と、人間味のうるほいとを保護開発するための教育そのものである。」と確信を持って言い切るのである。鈴木三重吉も小学生の時、母を失い、母のいない淋しさ・孤独を「亡母を慕う」の綴方を書いて少年雑誌に投稿し、入選した経験を持つ。それ故に前掲の「創作的感激」という三重吉の心には三重吉自身の体験に裏付けられていることだけは確かであろう。それが、「たれも揃つて味得させておくことが絶対に必要である。」という主張となり、説得力もある。さらには、「その感激そのものさへ、道徳的感情の基礎ともなつて

残留するからである。」と述べる三重吉の慧眼には感服するのみである。強烈で忘れ得ぬ想い出が人格形成に影響を及ぼすことはよく言われることであろう。

次に三重吉は大野小学校の子どもの綴方について次のように述べる。

大野校の生徒の作品には方言が非常に多い、これは私も国語の統一の必要から言つて、永久に黙過しようとするものではない。たゞ私は綴方をのび／＼とか／＼せる一手段として、標準語にとはい口語を使つてゐる地方の児童、特に低学年の児童には、標準語のみによつて綴ることを強要するよりも、口にしてゐるまゝの方言をもまじへて、どん／＼か／＼せるのが利得であることを主張して居る。むりに馴れない標準語によらすことは、丁度われ／＼が外国語を話すときの不便と同じく、言葉そのものゝ不自由から思ふことも自由に書きこなすことが出来ないからである。かういふ便宜上の見地からと、もう一つは少くとも、対話そのものは方言でそのまゝ直叙した方が実写的に躍動するからといふ、製作上の効果から、或年齢までの児童には、方言の混用を仮りに許し、又仮りにすゝめてゐるまである。

つまり、三重吉が主張しているのは、方言使用の許容範囲である。三重吉の述べる「標準語」は「共通語」と訂正すべきであろう。現在の如くテレビ・ラジオ等のマスコミの発達によって子ども達には、共通語の使用、理解は容易となつてゐるのが実状であろう。逆に、今は子

ども達の生活している場所の生活語である方言が使用できなくなつてゐる現実を無視は出来ないであろう。国語科教育、あるいは、総合学習において地域の方言を掘り起こし、地域の生活文化である方言を大切に運動を起こすべき時期に来てゐると把握するのである。

筆者は、相手や立場によつて生活語である方言を使用したり、共通語を使用する能力をつけるべきであろう、という意見である。

また、三重吉は大野校の綴方の特色について、次のように述べる。

大野校のこの綴り方集の輝きは、むろん校長の指導の光そのものであるのは勿論なれど、さしあたり私は、そんな意味よりも、まづこれをもつて、たいていの児童は綴方の創作にたいして、これまでの光を放ち得る素質をもつてゐることの証左として、児童の尊い恵まれの礼讃を促し、同時にかうした児童の性能を減殺するものは、愚教師と悪家庭の罪に外ならないことを警告し、その反対に、教師たちの指導さへ完全ならば、どん／＼第二の大野校、より以上の大野校を現出し得ることが容易であることの訓戒として多くの人の注意を引きたいと思ふ。

最後に、私はこの際に、綴方を伸びさせる根本的手段、換言せば綴方の最重要な指導そのものは、教師のすぐれた鑑賞にあることを、論理的に附記する時間のないのは遺憾である。

以上の三重吉の指摘である「教師の指導さへ完全ならば」の内実を明確にすることは重要である。そして、「教師のすぐれた鑑賞」は子

どもの綴文力の発達のためには大切である。

中内敏夫氏は、三重吉の述べる、「教師の指導」、「教師のすぐれたる鑑賞」について「生活を耕すということ」と題して次のように述べる。

……生活綴方のしごとの祖型の創始者たちが、同時代の「新教育」の国語科綴方(作文)の方法だった。「よい作品のための生活指導」という方法の、目的と手段の関係を逆転させて、「生活指導」をそのしごとの目的の座におしあげてきたところに成立したものであった。もう半世紀をこえている生活綴方の歴史に一貫性があるなら、このとき以来、生活綴方のしごとは子どもの、さらには青年、大人の生活指導を目的としてきたはずである。

じっさい、綴方教師とは、まずなによりも、子どもの「生活」を耕し、これを太らせることを大切にする教師たちである。子どもたちの学力や作品の裏側にはかれらの「生活」という重い世界がくっついていて、これを耕さなければ学力も「よい文章」もあったものではない。というよりも、この「生活」を太らせることの方こそを、教科の指導によって学力をのばし、教科外活動の組織によってその自己規律をきたえることの目的にするべきである、とかれらは主張する。こう考えることができるようになるためには、教師たちは、世間的にも精神的にもめくるめく自己変革をとげなければならない。いろいろな誘惑とたたかわなければならない。しかし、これをしとげなければ、いやでも「ツクリ」「ツケル」力の働く時代であって、子どもを一人前に育てる教師になりえないとするのが、

生活綴方の教師論である。<sup>(5)</sup>

つまり、中内は、教師は、子どもの生活にかかわって、子どもの生活を耕すことが重要であるというのである。三重吉の「教師の指導」を中内は具体的に「よい作品のための生活指導」と生活綴方の歴史に学びつつ述べるのである。三重吉の「教師のすぐれたる鑑賞」については、おそらく、中内は否定するであろう。

「日本作文の会、一九六二年度・活動方針『意義ある伝統のもとに確信をもって前進しよう』」には綴方における生活指導について次のように述べる。

7 生活綴方・作文指導でいう、いわゆる「生活指導」という概念を整理していくようにつとめる

わたしたちのよく使う「生活指導」というコトバがあいまいであったために、いまさまざまな混乱が生じている。生活指導ということが「仲間づくり」「学級集団づくり」という形で具体的になってくると、ついには「生活綴方的学級づくり」とか「生活綴り方的方法による集団づくり」などといわれるようになったりもする。しかし生活綴り方の実践者たちが「生活指導」にとりくんだのは、子どもを受けもつ教師としてこれをなしたのであって、この種の生活指導ないし「学級集団づくり」が、生活綴方のしごとと直截に密接不可分な関係をもつのではない。まずはじめに、わたしたちはこのことを確認する。それゆえこんにち生活指導を専門的に研究する団

体や個人の研究成果に、より科学的なものがあるのならば、わたしたちとしては、それにすべての教師が学ぶべきであることを確認する。「生活綴方による生活指導・仲間づくり・集団づくり」を、生活指導の一定式だというふうにはけっして固執しない。

さらに、わたしたちは、生活綴方のしごとで、今までやや安易に言ってきた「生活指導」というのは、主に「物の見方・考え方・感じ方・行動のし方の指導」であり、これは子どもの現実に対する見解・信念・意志・行動などの指導のことであることをハッキリさせる。<sup>(6)</sup>

つまり、ここでは生活綴方教師が安易に言ってきた「生活指導」という言葉を使用しないようにしようというのである。そして、「物の見方・考え方・感じ方・行動のし方の指導」を徹底するようにしようというのである。にもかかわらず綴方と「生活指導」は密接な関係がある。その内実の検討は今後とも、必要であることを指摘しておく。

田中豊太郎氏は、次のよう『綴り方生活 村の子供』を評価する。

……木村氏の綴り方教育に対するや、極めて真剣である。氏は綴り方の教育によつて人生を創造して行こう、これによつて広義の道徳教育にまで深めようとして居られるやうである。氏の企図されてゐるところは、『村の子供』の中に盛られてゐる子供の作品が、何よりも有力に物語つて居る、この点、私の強く共鳴するところである。

◇  
『村の子供』に対して、別の意味に於いて私の心を打つものは、子供の作品に漲つてゐる地方色である。

由来、綴り方は子供の生活の表現であるが故に、その子供の生活環境に彩られることは当然でなければならない。然るに、やゝもすれば題材より内容形式の端に至るまで、ある型に入り、個性の輝きは勿論、地方的色彩が乏しくなり勝ちである。

木村氏は、この点大いに信ずるところをもつて、何等の躊躇なく大胆に、真剣に子供の本然の叫びを聞かうとして居られるが故に、個性味は勿論、地方色に富むこと著しい。この点は、同地方の方々の共鳴を呼び、他の地方の方々には、ある見聞を広めさせるものがある。方言是非の問題は別にしてこの味を存分に味はふことが出来る。<sup>(7)</sup>

つまり、田中豊太郎が、「氏は綴り方の教育によつて人生を創造して行かう、これによつて広義の道徳教育にまで深めて居られるやうである。」と指摘する如く、文助は、『悩みの終身』（厚生閣書店 昭和七年五月十五日発行）を発表する。その序に次のように修身と綴り方の関連について述べる。

修身と綴り方とは、人性の、或る深い所を覗つてゐる点に於て一致してゐると信ずる。児童の真実の叫びは綴り方に現れる。綴り方は、精神内容を的確に表現した具体の証書である。その引き出した

ものを捉へて、正しく發展させるやう、修身はそこに立脚してゐるものでなければならぬ。時間と仕事は別々であつても、本領はそこにある。それ程、両者は密接の關係をもち、対人性的態度を作る上、全教育の上に重大な役割を演じてゐるのである。<sup>(8)</sup>

つまり、文助は綴り方と修身とを関連づけながら、綴り方では、「精神的内容を的確に表現した具体の証書である。」と言ひ切るのであり、修身は綴り方で表現された事実<sup>(9)</sup>に立脚しながら、綴り方で引き出されたものを正しく發展させる役割があると、直言する。本文中にも「悩みのないところには修身はない。」とまで言ひ切るのである。この立言は今もって新鮮な響きを持つてであらう。そして、新聞や資料を利用することを勧め、教科書だけの押し付けの修身には反対する。

田中豊太郎の『村の子供』を見る眼の鋭さ、的確さには敬服する。最後に、『村の子供』にある文助の「序」を紹介する。

村の子供！ 何といふ小さい淋しい名だ。

それでも、其処には子供ばかりの、田舎ばかりの、其処相応な世界が開かれて居て、夫れに適はしい生活が営まれてゐる。賑やかさ、花々しさには乏しいが、静けさ長閑さの間に溢れる計りの純真さと、潑刺さが殆ど永劫に続く豊富を持って彼等を囲んでゐる。そして彼等でなければ味到し得ないこの世界の鍵を、自らの力によつて握つた彼等は、其幸福に恐悦するであらう……と共に「君達よ」と都の友だちに呼びかけずには居られない焦燥を感じる。

田舎の子供の綴方は田舎の土に咲いた花である。「地理」に根を下し「歴史」に育てられて、かう咲くより外、どうにもならなかつたのである。

青い山の間に、稲のそよぎの中に、鳥の声をきゝ蛙の声をきゝ、石や草花や棒切れを玩具とし、藁葺の家に親子膝つき合せて育つて来た……そこにはそこにはしか見られない心の生活があつた。

電車に乗り、石造の家に住み、水道の水をのみ、セルロイドやブリキの玩具で育てられたとは又違つた生活があつた。

子供は大人になる準備の人ではない。大人とは異つた人である。子供には独立した子供の生活がある。真にすばらしい驚異すべき世界がそこに開かれてゐる。そして愛が、純情が、如何に放胆に潑刺に遍満してゐるかを見る時、吾々はそこに珈つべき吾五尺の軀を発見し、寧ろ脆かん心を抑える能わざるものがあるではないか。かうした処から生まれた芸術が大人のそれより、低いとどうして言はれよう。吾等は其、人の大小を見ず、只其純真の輝を見るのみである。全国の綴り方も彼等には珍しい音づれとして響くが人馴れしない彼等の胸をい打つ力は弱い、彼等は真に此処にのみ彼等だけの本当の芸術の世界を発見する。然し其の芸術は——全国一般と——共通の根をもつてゐるものであるから、徐々に其範圍を広めて行つてやがては一致する、今其途上にあるのである。此意味に於て私自身の仕事として彼等の出発にはなむけするものは此「村の子供」しかない。

此集に現はれたものは思想的には真に低級であり、知的に貧弱で

ある。語彙も不足、漢語にも熟してゐない。然し夫丈に生れ儘の素直さ大胆さといふ強みがある。私はせめて、これ丈でも素直にいぢけさせないで育て哺んで行きたいと念じてゐる、「功利」が伸べる「妥協」の手を勇敢に払い除ける、正しき事の前に何事も恐れぬ、勇氣と純情の美しさを、永遠に彼等の貞操として梓宝として保たしめたひとに念じてゐる。（編者）

筆者は、文助の文章に感銘を受けたが故に殆ど全文を紹介した。文助の持つ文学性にも心惹かれている。何よりも文章全体が謙虚な心情であり、都会の綴方に対して村の子供の綴方を掲載していることである。この意味は今日においても決して色褪せることはないであろう。

自然の豊かさの中の子ども達が自己の生きている矛盾や、家族の生活の現実が語るように書かれている。

### 三、木村文助の綴方に於ける生活指導

北海道の国語教育同人誌「国語と人生」（大正十五年七月発行）に文助は、「綴方における生活指導の根柢」と題する論文を書く。文助はどの様に綴方の指導を考えていたのか、あるいは、綴方に於ける生活指導について次のように述べる。

どういう綴方がよいか、それに甲をくれるか、あまりに区々である。これをきめる標準がないか、単なる主観、好意、趣味によってであるか、選者の文章観という他から視知されない、鑑賞批評の余

地なきものでもきまるものであるか。そうとせばすべては曖昧模糊たるもので、綴方というものはなり立たない。むろん深所、奥処は言葉という道具では説きえられないかもしれないが、ある点まで、いな大部分、理論的に闡明しえられなければならないのであると思う。

つまり、文助の述べる如く、綴方の評価は教師にとって難渋する課題・問題である。そのことは教師の指導する狙いが明確でないことであり、一方、学習する生徒・児童にとっても目的意識なしに書かされる場合が多いことにもなるであろう。この文助の考えは現在の綴方・作文教育においても変わらない現実であろう。

文助は、綴方に於ける生活指導についても次のように述べる。

われわれの行為を静かに考えてみると、善、悪と判然ときめられるほど単純なものではない。朝おきて夕眠るまでの平凡な一日をふりかえてみても、善悪と名づけられぬものが九分どおりをしめており、知情意が種々の程度に交錯した複雑なものである。たとえば子どもがやかましいからしかったことだけについて考えてみても事実、朦朧たるものである。したがって善なりとも理くつはつけられるものである。そんならこれらはいいかげんな無価値なものであるか。（中略）

……同一の事実からでも作者の見方次第でいろいろの異なった感じをうるのである。そして外面的に悪と名づくべきものでも、ときに寛容すべきもの、同情すべきもの、痛撃すべきもののいろいろを



感じるのである。

こうして綴方からすべてを包容した正しい見方、考え方がやしなわれていくのである。さらにすすんで義理と人情とか、個人と個人、個人と団体の抗争の如き輪郭のはっきりしたものでも、対立した両者がともに正当であったり、また相いれざる正しい要求をしたりする、一方が一方を克服することによって解決されないようなものがあることをこれによってしるのである。かくて善と惡の衝突、惡と善の衝突、善とも惡ともなづけられぬばあいの心持ちやら、日常の行為を司祭しているのを見るのである。これらの複雑したものものにたいして善惡という如き抽象的、概念的なものをもってきても、生活を司祭するうえにおいては、あまりに無力なばあいが多い。事実、実権をにぎっているのは、このいずれともつかぬ生命の力、人格の力である。(中略)

外面的には些末でも、重大な意義をなすばあいはけっして少なくない。そしてこの力が全身体、全精神をつくして渾一された——つまりその人のあらゆるであるかぎり、一方に偏せず、全般に(主として精神)あたって考慮をつくし、見方、考え方を正しくするよう指導していかなければならないものであると思うのである。これがわれわれの綴方においてその価値を生活味の多少に置き、かつ指導を高唱する所以である。

つまり、文助は、生活指導の根柢を「全身体、全精神をつくして渾一された——つまりその人のあらゆるであるかぎり、一方に偏せず、

全般に〈主として精神〉わたって考慮をつくし、見方、考え方を正しくするよう指導」に置くのである。つまり、子供の人格形成に向けてその価値観を涵養することを綴方に於ける生活指導の重要な役割とするのである。文助は、『悩みの終身』(厚生閣書店 昭和七年)の冒頭に次のように述べる。

悩みは修身であり、修身は悩みである。悩みのない所に修身はない。本当の修身は悩みから生まれる。そこから出立して何処までも発展を続ける。現代そのものはもう幾多の？をもつた一つの大きな悩みであり、人々は悩むべき運命を負ひながら、さうした社会に生まれてくる。だが、まことは、その悩みこそ人を人にし、時代をより文化に導いて行く機会を造るのである。

然し、悩みでさへあればそれで良いといふのではない。それを正しい解決に導いていく所に要諦がある。それを教師が解決して見せることではなく、児童をして自ら満足するまでに解決せずにはゐられないといふやうな態度と解決のヒントを与へる所にある。

つまり、「悩みは修身であり、修身は悩みである」と冒頭の文章で大胆に言い切る。そして、「まことは、その悩みこそ人を人にし、」と修身のよって立つ立場を明確にする。ここで筆者が指摘したいのは、綴方に於ける生活指導と、修身に対する立場が同一の地平に据えられていることである。したがって、綴方と修身が深い関連を持つようになることは文助にとっては当然の帰結であらう。

## 四、村の子供達の生活台に立脚する綴方

大野小学校を支える、あるいは支えられている地域の生活台（風習はそこに生きている人間の慣習・風俗、生き方等を含めている。）にかかわって子ども達の捉えた田舎の実体を表現した綴方を幾つかを紹介する。

## 稲刈

高二 田島たき

私が学校から帰って家に来て、しとめ（爺）に寄りかゝって前の田を見渡すと、母が一人で稲を刈つてゐた。祖母に「おらも行って稲刈りするや。何、まだ飯支度するにも早いし」といふと祖母は「馬鹿、お前が刈れるなら誰も心配しない。初は手を切つて／＼」といったが、私は「なして手切るてか（切るもんですか）」といつて厩に行つて鋸鎌を持つて飛んで田に走つた。「おらも来たや」と叫んで行くと母はぎろりと見て「稲刈りに来たつて、頼まないこと（頼みもしないのに）行け／＼。行って晩支度をしないか。刈れないしてあ（刈れないから）行け／＼」と激しくいつたが私は刈りたくて／＼左手に稲を握つて、切れる鋸鎌でざりと刈つた。嬉しくて／＼刈つたが、束ね方が分らない。「どうしてきゆうと廻すの」といふと母はあきれたやうに笑つて「手切つたつて知らないど中々難しいもんだ」といつて手を取つて教へた。三把まで教へられたが、とてもやれない。だまつて母のやるのを見てをれば雑作もないやうである。私は母に教へられないで別の田に行つて一人でまぢがつては、

やりやりしたら、母のやるのと同じやうにやらさつた（やることが

出来た）。もう一把やつて見ようと思つてやつて見たらやはり分つた。「おら覚えた／＼」と母のところへ行つた。母は「どれやつて見れ」といつたので束ねたら「うん、さう／＼」といつたので嬉しくて／＼七把刈つた。覚えたら母と競争しようと思つて、手を早めたら、あつと思う間もなく小指を斜に切つた。握つてゐた鎌を投げ付けて、切つた指を握つて家へ走つた。行く時母は「それ見れ、人のいふこときかないから」といつた。家に手を握つて入つたら、祖母は「手を切つたべ」といつたから、「少しのう」といふたが、やめで／＼（痛くて／＼）どうにもならない。夕飯の支度はしなればならない。「痛い」といへば「頼まないことをして」と叱られる。痛い手をして夕飯の支度をした。御飯を食ふ時「あゝ痛い」と手を見ると、祖母が「どの鎌で切つたか」ときいたから「一番切れる鋸鎌」といふと、顔をしかめて「鋸鎌で切つたらやめで／＼」といつた。その夜はやめで／＼眠れなかった。

〔評〕 年級のわりに事象に対する把握力が少し不足なので表現が稀薄ですが、併しともかく純朴で一寸もませ／＼したところがなく、子供らしい歓喜などが、いき／＼と出ているところが取柄です。

木村文助の綴方指導は、原則的には、子どもの内面が見える必要性を示す。子どもの生活の背景の分からない人間は指導できないということになるのである。つまり、綴方は、子どもの表現能力と育成する一面と、さらには子どもの人生に対して教師は生活指導を綴方実践を通じてすることが是非にも求められることを示しているのである。

『綴方生活 村の子供』の「序文」に「子供は大人になる準備の人ではない。大人と異つた人である。子供は独立した子供の生活がある。真にすばらしい驚異すべき世界がそこに開かれてゐる。そして愛が、純情が、如何に放胆に潑刺に遍満してゐるかを見る時、吾々はそこに耻づべき吾五尺の軀を発見し、寧ろ跪かんと心を抑える能はざるものがあるではないか。」と子供の独自性を高らかに謳う理想の高さを見ることが出来るであらう。

高二、田島たきさんの「稲刈」の綴方をどう評すべきであらうか。

筆者はこの生活の姿勢を評価すべきである、と捉えている。確かに、三重吉が「事象に対する把握力が少し不足」、ということとは是認するとしても、生活の姿勢は評価すべきであらう。母親一人で稲刈りをしているのを見かねて稲刈りの手伝いをして、しかも怪我までするのである。出来ないことが出来るようになることは子どもの成長の一つのメルクマールであることをここでは見出すことが出来る。この経験の質を綴方教師は見逃してはならない。そして文章にちりばめられている会話もこの作品の雰囲気、人間的な愛情を醸し出す効果をあげている。『おら覚えてく』と母のところへ行つた。母は『どれやつて見れ』といったので束ねたら『うん、さうく』といったので嬉しくてく／＼て七把刈つた。覚えたら母と競争しようと思つて、手を早めたら、あつと思う間もなく小指を斜に切つた。」の表現の底に流れている母親と子どもの深く、信頼し合っている愛情、そして、稲刈りで稲の束を束ねることが出来るようになって母親と競争しようとする気持ちも高まりも示す。子どもを指導する教師はこのような眼を持つ必要がある。

るであらう。それを表現方法・表現技術のみで評価するの愚は避けるべきである。この綴方は、農村に於ける子どもの体験が生きて書かれている。

次の綴方は、「赤い鳥」に第一席に当選した作品である。その時の様子が次のように述べられる。

さて表現を通して生活指導を目標にすべき事、而して児童及び環境の決して不可ならざるのみならず、寧ろ優位にあることを発見するに及んで、自分は思はず勇奮すると共に、切に職責感に打たれた。「田舎の子供の綴方は下手なものなり」と公認する様にしたのは、一体誰の責任であるか。天下の教育者挙げて之を承認し、村落教育者亦安じて之に服して来たのは甚しき不見識、怠慢の至りではなかつたか。此公認は速に改訂されなければならない。夫れには先づ自ら大に鞭たねばならぬといふ事を痛感したのである。闘いの的は新たな鮮明さをもつて迫つて来、打ちに於ける力は切に「負けるな」とけしかける。だが、かくなればなる程孤立的な淋しさは、又一層強くなるのであつた。

此時である。偶然——真に偶然、目に触れたのは雑誌「赤い鳥」であつた。名は聞いた事はあつても見た事はなかつた。が、「面白い童話劇があるから」と同僚のN君が切りにいふので借りて来て見たのである。すると童謡でも童話でも図画でも他誌の追従を許さないが、とりわけ、其綴方は主幹鈴木三重吉氏が一家の見識を以て厳選するので一等権威があるといふ事がだんだん判つたので、

尚よく読んで見た。何とこれは又変つたものである事か。そして今迄の選者からは一溜りもなく斥けらるゝ様な田舎の文章の何とこれは又堂々跋扈してゐる事か。そして価値決定の標準は、どうやら自分の考へ尽くしたものと同じものゝ様に考へられてならなかつた。夫で今迄は投書とうした事がなかつたが、試に五六篇送つて見た処、其結果は大正十一年八月号に現はれ、応募数二千篇中「櫓」は第一席に当選し、「兄の病氣」は次号の第一席、「右の手」は次々号の第三席となつたのである。自分では多少の自信があつたとしても、かうした推奨を受けるとは夢にも思はなかつた。淋しい孤立から、いきなり大きな手で救上げられた自分は、全く感泣にも値するものがあつた。茲に百万の味方を得た様な力強さを感じた。「子供の雑誌の一等が何だ」と嗤ふ人には真面目に説明したくない。只此雑誌以外には何処にも投稿しない事をいつて置く。又「赤い鳥の綴方と小学校の綴方は正しく一致すべきであらうか」などと聞く人に対しては、「さういふ面倒な事は私は知らない。私は只自分の綴方を送つた丈だ」と答へる。かうして同誌の終刊号迄五十七回当選した筈である。

大正十一年八月号の「赤い鳥」に第一席で当選した高一 新栄とよさんの「櫓」の全文を次に紹介する。

いつかの冬のことであつた。私はまだ小さい時であつたから、はつきり分らないが、家の兄さんが友達と三人で遊んでゐた時、櫓が来たので、二人の友達、兄さんの知らない中に、家の小さな櫓を

持つて行つてその走つて来る櫓に付いたら、馬追に怒られて、驚きのあまり、其儘、馬追の櫓に付けてやつたのを、家の兄さんが見てその櫓を持つて行かれると大変だから走つて行つて取ろうとした。すると馬追は兄さんが付けたのかと思つたのであらう。いきなり兄さんの目の少し下の方を、あの鋭い手綱で叩いたので、痛いから逃げたら、運悪くも川の中に落ちて着物はどつぷり汚し下駄は流れた。下駄はよその人が取ってくれたが、兄さんはおい／＼泣いて来たので、母達は兄さんからその事を聞き、早速馬追を家に連れて来たら馬追はあやまらうともしないで、庭にばかりとして立つてあつた。それから家の父や兄さんと馬追と三人で大声を立てゝ争つてあつたが馬追がきかないので、上の兄さんが大変怒つて「さうぐつぐつしてゐるんだら、分署にあべ（行かう）」と引張る様にして連れて行かうとしたら、今度は馬追も怖くなつたと見えて「分署に行くことは許してけれ」とか、色々なことをいつて、何度も手をついてあやまつたので、許してやつたが、外には人が黒山に集まつて見てあつた。怪我した兄さんは泣き／＼ご飯を食べながら「飯食えば目の処痛くて喰れぬあ」といふのであつた。その後、私は其の馬追を二三度見た。見る度にこの人が内の兄さんを怪我させた人だ、憎らしい人だな、兄さんの代りに妹が、懲取つてやりたいなあ、あゝ憎らしい人だと思ふと、心の中でもう飛びかゝつて行きたくなるやうであつた。友達達の為兄さんは、いらぬ（しなくともよい）怪我をした。何、兄さんでも付けたのであるまいし兄さんが櫓を取りに行った計りで痛い思いをしたと思ふと、友達を憎くて仕様がなかつた。又、いくら

付いたつて子供の事だもの、そんなに怒らなくてもいいと思ふ。こんな人は、どんな恐ろしい心を持つてゐるであらう。私は小さいながらも兄さんが可哀想でならなかつた。今でもその人をふむくつてけたい(踏蹴つてやりたい)気がする。

〔評〕 北海道の大野小学校からは色／＼傑れた作が来ました。

新栄さんの「櫓」はありのまゝをよくかき上げてゐます。とかく年級の上の人は下等な表現にかぶれたり、こましくくれた、かきかたをします。殊に女の人には、齒のうくやうな表現をする人が多いのでうんざりしますが、この「櫓」なぞは、どこまでもうぶ／＼して一寸もいやみがありません。

「人が……見てあつた」といふ様な変な言葉づかひもありますが、このくらゐに出来れば、まづ上手に標準語で綴つてゐると言はねばなりません。実写的にいへば事実をよくつかんでかいてゐる上に言葉によけいな飾りがないので、すべてがはつきりと、目に浮かびます。馬追たちが憎くてたまらないところなぞは、しまりの足りないかきかたですが、その代わり子供らしい感情がまぎ／＼と出てゐます。(赤い鳥——大正十一年八月号最初の人選作)

文助は、自ら誠心誠意、子どもの為綴方や図画を子どもの生活の重要な役割と認識し、ひたすら子どもとの実践に尽瘁する。にもかかわらず、文助に対する非難が起こってくる。

文助も反対非難について次のように述べる。

然し、これまでの教育思潮や綴り方の主張が、人生乃至生活に対して全然無関心であつた訳ではない。高調した思想とか、興味とか間接的には色々あつたが、要するに目的観の内容が不明で、寧ろ実用的、功利的の方便であつたかの如くに見えるのである。従つて二元的の考を脱し得ず、内容よりも書かせる技術上の事を第一とした、非常に考への進んだ人であるとした処で、内容形式に軽重はない、車の両輪の如きものであるといふ位が関の山であつた。

処が教育者の所謂形式を殆ど無視し、(文の形式は極端に重視す)内容の人生的価値を綴方の第一義のものとし、其処に其の真使命を認めて、終始一貫、主宰の雑誌に於いて新綴方の建設に努力したのは鈴木三重吉であつた。

一体、此十年間に實際教育上、其の児童性に立つた革新、例へば綴方、図画、童話、童謡、幼年読み物等は全く隔世の感がある程である。而して夫等は、殆ど氏が児童に理解ある文芸家と協力し、主宰の「赤い鳥」によつて絶えず宣揚力説したたのに負ふ事は、何人と雖も否む事は出来ない。かうした革新が、教育教授に是れ日も足らざる教育家よりは、返つて門外ともいふべき文学者によつて遂げられた事は、皮肉といはなければならない。

次は「善い詞で書く」と申くれないし、悪い詞で書く」と申くれないのは可笑しい」とか、「何でも露骨に書かせる様だ。此間酒飲んでうつかり唄つた処を書かれた」といふ如き、所謂素人、常識派の評で真面目に相手にされぬ種類のものであつたが、夫等は相手にせず、只管実績の向上に専心したので、児童も非常に生気を帯びて来、且つ生活方も

一変したかに見え、其作品は殆ど毎号「赤い鳥」に入選した。

此地は旧来最も政争が激烈で、小さい事で問題となり勝ちな処なので、俗衆は已むを得ないが、夫にしても細心な教育的考慮を払ひ、方言の使用、生活の描写等に努めて誤解を避ける様にした。各学年綴方の謄写等は必ず目を通し、少しでも差し障りありさうなのは、時日、名称等を変改した。（教育的には其の必要ないものまで）夫にしても何等障害の生じなかつたのは、今にして思へば、全く僥倖であつたといはざるを得ない。否、問題になりかゝつた時は、「赤い鳥」入選などから有名（？）になりかゝつてゐたので、十分の理解はないにしても、自ら非難を封ぜられた形となつて、中には目を刮いた如く共鳴するものさへ現はれて来、其のぐつぐついふ者に対しては、徒に事を秘密にしたり、耻がたりする事の卑しい点を指摘し、教育の真義を説法するやうな有様になつて来、教育上の施設等にも可なり注意を払ふ様に見えて来た。<sup>⑩</sup>

つまり、木村文助が鈴木三重吉の「赤い鳥」の精神に賛同して大野小学校の子ども達の綴方の応募に応じたというのである。鈴木三重吉の「生活をありのまま」に書く綴方の主張に文助が心惹かれたことは十分に理解できる。

峰地光重は、「文芸主義としての『赤い鳥』綴方」と題して次のように述べる。

鈴木三重吉氏によつて主宰された雑誌「赤い鳥」の創刊されたのは、大正七年七月のことである。私などはその頃綴方研究に志す一

訓導として、この「赤い鳥」の出現をどんなに喜んだことであらう。あの美しい表紙絵、それから新鮮な感覚を盛り上げた童話、童話の中でも鈴木三重吉氏のあの子供の心理をうまく把握した童話——それから童心そのまゝな屈託のない児童の綴方及び童謡——私達にはそれは大きな魅力でさへあつたのだ。

「赤い鳥」創刊号には、次のやうな綴り方作品が載つてゐる。

てんかん

尋六 吉田録郎

僕の組に二人組といつて、二人のいたづら者がある。一人は吉田といつて豆腐屋の子だ。一人は齋藤といつて靴屋の子だ。吉田はずるくて名代のおせつかいである。齋藤の方はうそつきでなまいきだ。なにかいふとすぐくつでけるので皆からのけものにされてゐる。或時、齋藤が機械体操をしてゐ落ちて足をくじいた。吉田はこれをおぶつて教室につれて行つた。それから二人は仲よくなつた。やはり同じ級に神原といふてんかん病のものがゐる。それが時々てんかんをおこす。そのたんびに吉田は神原をおぶつて家につれて行つてやる。それで神原とも仲がよい。

〔評〕 すべて大人でも子供でも、みんなかういふ風に、文章はあつたこと感じたことを不断使つてゐるありのままのあたりまへの言葉を使つて、ありのままに書くやうにならなければ、少なくともさういふ文章を一番よい文章として褒めるやうにならなければ間違です。<sup>⑪</sup>

筆者は、この綴方の題目、内容の一部に違和感を持っているが、子どもの「ありのまゝ」に書く綴方ということもあって、敢えて原文を紹介することを許して頂きたい。

さらに峰地は、「赤い鳥」の評価・影響について次のように述べる。

そして其後「赤い鳥」綴方は号を追うて著しき進境を示したのであった。そして当時の綴方教育家は期せずしてこの「赤い鳥」綴方の傘下を集るといふ風であつたのである。後日「村の綴方」の木村文助氏、「夏みかん」の高橋忠一氏「綴方教室」の大木頭一郎氏・清水幸治氏「綴方の書」の木村不二男氏、文集「草の芽」の多胡貞子氏等の綴方教育家をだしたのであつて、「赤い鳥」こそは、綴方教育者の大きな温床であつたと思ふのである。（中略）

大正中期「赤い鳥」綴方によつて代表される芸術主義綴方が抬頭した時代の事情はどうであつたらう。それまでの子供の文章と言へば、大人の言葉のうち成るべく平易なもので、出来るだけ平易な型に組立て、模倣し練習することであつた。こゝでは子供の言葉子供の考へ方など何ら独立的には考へられなかつた。こゝで「赤い鳥の綴方」実践は、子供の生活、子供の考へ方を、子供の言葉で綴るといふことに着手した。「赤い鳥綴方」は従来の古い形式を打破すると同時に、確に綴方に新鮮な内容を充実させて行つたのである。

芸術主義綴方は然し余りにも「子供」といふ既成概念にとらはれすぎた。「子供」は在るがまゝのものだ。「子供」は大人が手のつけられないものだといふふうに考へた。「赤い鳥綴方」が十幾年かの営為によつて、子供の描写形式の一高峰を構築したときに、われわれはまた一つの反省が必要なことを痛感しなければならなかつた。

子供の文章の内容が、「在るがまゝのもの」「大人が手のつけられない

いもの」であるなら、われわれの綴方実践は、今や行くところまで行きついた「子供の描写形式」の模倣と練習にすぎなくなるのではないか。綴方の価値は表現の上手下手で定まるのだ。価値ある内容は偶然の機会に俟つほかない——といふのでは、本質に於いて、昔の模倣と練習の綴方と何処が異なるであらうか。

つまり、峰地光重は、今迄の綴方は、「大人の言葉のうち成るべく平易なもので、出来るだけ平易な型に組立て、模倣し練習することであつた。こゝでは子供の言葉子供の考へ方などは何ら独立的には考へられなかつた。」と規定するのであるが、子どもが子どもとして独立した存在であるとの認識は完全に欠落していることである。したがつて、大人が見て、模範的な文章を書き写させたり、手紙文、実用的文章、つまり、成人して役に立つ文章の練習であつて、自分の生活を書くといふことは完全に無視されていたのは当然であらう。つまり、子どもが人間として独自の存在であることを発見するまでには猶、時間が必要であつた。

鈴木三重吉主宰の「赤い鳥綴方」の功績と言へば、「子供の生活、子供の考へ方を、子供の言葉で綴るといふことに着手した。」ということである。しかし、子どもを既成概念で捉えていたことであることが欠点である。「芸術主義綴方は然し余りにも『子供』といふ既成概念にとらはれすぎた。『子供』は在るがまゝのものだ。『子供』は大人が手のつけられないものだといふふうに考へた。」といふことは、子どもを独立した一個の人間として把握することはまだ理解されていず、子どもを大人との関係をも視野に入れて見る必要性もなかつたのである。

木村文助の長男であり、東京で小学校の教師をしており雑誌「生活綴方」の同人でもあったが、第二次世界大戦後、父親の住む北海道亀田郡森町で、高等学校の教師になった木村不二男氏は、「父と子の作文小史」と題して、次のような示唆に富む事実を述べる。

友納氏の課題作にも芦田氏の随意作にもあきたりないで鈴木三重吉のいわゆる『赤い鳥』綴方に奔った父文助が、最初歩調を揃えたのはいうまでもなく、共通目標を見出したと思ったからであった。それを具体的に語るものといえば、左のもので、この傾向は父にとっては芦田氏側にも、友納氏側にも見出せないところの、いわば天来のものでこそあった。（以下、表題とは別に、いまの作文が綴り方とよばれていた頃に立つ故に、すべて綴り方というのも歴史的な小論だからである）

お母さま

東京下谷 加藤 健

やっと今、房州の館山につきました。途中では、舟がゆれて、こわごわした。お父さまも、僕も徳ちゃんもみんな酔ってしまいました。

はじめ、舟のボーイが、小さなかんだらいを持って来た時、僕が「お父さま、あれなあに」と聞きましたら「あれはボーイがあの中へいくらかお金を貰って歩くのだ」と仰いました。

そのうちに、お父さまのところへ持って来ました。しかしお父さまは一文もお金をおやりにならないで、そのカナダライをお取りに

なりました。

変だと思っていると、僕の隣に寝をべっていたどこかの子が「ゲエ」と言って、同じようにカナダライの中へはきました。

それを見ると、僕もたまらなくなって吐きました。しまいには黄いろの水ばかりが出て、苦しいございました。徳ちゃんは「こわいよう、こわいよう」と泣き出して、お父さまを困らせました。帰りにはもう汽船に乗るのはいやです。

あしたから、みんなで海水浴をします。館山は沖に二つの島があつて、景色もいいところです。さよなら。

〔評〕 以上八つの作文（注・創刊号所載）は私の手もとに集まった、二百七十七篇の中からみんなのお手本になるようなよいものばかりを選びぬいたのです。……（中略）……すべてを通じて、字の間違いと仮名づかいの誤りを直ただけで、一寸も他人の手は入っておりません。すべて大人でも子供でもみんなこういう風に、文章は、あつたこと感じたことを、不断使っているままのあたりまえの言葉を使つて、ありのままに書くようにならなければ、少なくともそういう文章を一ばんよい文章として褒めるようにならなければ間違いです。これらの作文はどんな立派な芸術家に見せても、みんな驚いて褒めておりました。全く少しの厭味もない綺麗なよい作文です。（大正七年七月）

ここに注目されねばならぬことは、この傍点の個所で、これはこの創刊号に現れ、終始一貫二十年の久しきにわたっていわゆる『赤い鳥』綴方の根本信条となっていたものであつて、『赤い鳥』綴



方といえこれ以上でも以下でもないのである。父が吸引されたのもこのいわゆる「ありのまま」である。<sup>(19)</sup>

つまり、子どもの書く意欲を支えながら、生活であつた出来事を自己の書くべき方向性を確かめ、さらには想を成熟させ、自己の生き方を軸にして書き進めたことはこの綴方から明白となる。

手紙文という文種も踏まえながら、舟酔いをして吐いたこと、父親の行動のさりげない表現ながらよく書かれている。最後の締め表現も余韻を残している。

翻って、木村文助の綴方実践について次に述べる。

かうして、少々本質的方面の見当もつき始め、力強さも加はつたのであるが、さて之を實際に当嵌めて、綴方の仕事の意味を考へて見る。是迄の授業では、多くの児童は「又綴り方だな、つまらない、書く事はないけれど、何か出さなければならぬ……」といつて、天井の節穴を眺めては考へ、考へては書く。「つまらないな、面白くもない」と思つて教師は検閲する。一步進んで「いや面白いのがあらう」と思ひ、また「あつたあつた、こいつは面白い」と甲をつけたとする。かうして一瞥的なり、徹底的なり優劣を選び分けたとした処で、結局児童との交渉は甲とか、乙とか、三四種の漢字の一字を選ぶに過ぎない。「大さうよく出来ましたといつた処で大差はない。」そこに何程の意味交渉があらう。「膝下訂正といふものがある」といふかも知れない。其の名はいゝが、中々順番が来ない。又偶に全級に読まれるものもあるが、夫れは何十篇中の一二編である。大多数は如何に衷心悶え苦み、且表現に悩んでも、夫が何処から響

き返すといふ事もなく、黙殺(?)されをはるのが多いのである。又反対のものがあつても、反省さるゝ事もなく、指導にも激励にも逢はないとせば、全く張合のない事夥しい仕事で、余程趣味でもなければ綴方が好になれなさうに思はるゝのである。

かうした事を考へた結果、自分は先づ四人宛の分団を組織した——夫は綴方の為計りではなかつたが——そして一人の作は三人に回覧して評点と批評、所感を後尾につけさせ、仮名、誤脱字は相互訂正させ、その上教師に出さす事とした。自分苦心の作を三人に見て貰へて、忠言批評を聞く丈でも書いた張合いはある。提出されたものは検閲して、評点と批評を加へて返すと、相互回覧して、自分の評との異同を比較反省し、訂正すべきものは訂正するのである。中には数回訂正提出する事もある。左の文は分団と教師、第二回は全級と教師の批評を経て、自己訂正したものである。教室の時間は殆ど之を鑑賞と批評に充て、甲の作品及生活指導の必要あるものは必ず読む事にした。

#### 稲荷祭の日

高二 富谷 千代

「只今」と言つたら、母が茶の間で針仕事をしてゐながら「千代、今日ね、お宮に婆さん達の踊あるから子供達連れて見によこせつて、祖母ちゃんと言つて行つたよ」と言つたので向ひの末ちゃんを誘つて「どんな事するんだべ、面白いべが」などと話しながら鳥居のあたりまで来たら、どーん／＼と太鼓が鳴り出した。走って神主さん家の縁側に行つたら、弟や友達も皆上がって見てゐた。

茶の間の方では、今一人のお婆さんが炉ぶちにお酒のコップを置いて、ふら／＼しながら大声で何か怒鳴ってゐた。そしたら何処かのお婆さんが頭を振り／＼畳をとん／＼踏んでのめる様にして躍ったが、少しやるとべつたり座つてはあ／＼と息をついてゐた。すると先の婆さんは大きな声して「立で、立で、此の婆、一つで止めると言ふ事あるもんか、うん、こらつ」と言つて立ち上がりながら、ぐつと座敷の真ん中へおしてやつたら「おや／＼困つたのう」と言つて、今度は向鉢巻きをして変な踊をおどつたら、皆腹をか／＼へて笑つた。それから片目の婆さんが白粉をべた／＼付けて鰯掬をやつた。お尻を振り／＼お客さんの膝の下まで箆を入れるので、皆逃げて歩いて大騒ぎであつた。上座の方では神主さんがちよびり髭をしてちよびちよびお酒を飲みながらにこ／＼してゐる。其の次の山中さんのお爺さんは床の間の柱に寄掛かつて「は、は、は、は」と口を開いて笑つてゐた。一スのお父さんは洋服を着て、箸で刺味皿<sup>ヌマ</sup>をかんかん叩いて囃してゐた。踊りが一寸の間止んだ時、西川の母ちゃんが私達の方へ走つて来て「赤い三尺してる人、一寸貸してけれ」と言つていきなり私の帯を解くに掛つたので、取つてやるつもりで後に手をやったら、私の顔を見て「やあ千代ちゃん来て居たの、済まないどもねえ、一寸だから」と言つて持つて行つたが、間もなく眼鏡を掛けてすつぱり手拭いをかぶり三尺を纏にして躍りながら出て来た。其の後から赤いばらの花の付いた長襦袢着た人や、直垂を着て腰にしめを下げた人達も出て来た。一人が何かを躍ると又一人立ち、二人立ちして、お終ひに皆の人が躍つたので何が何だかがちや／＼して

さつぱり分からなくなつた。不意に高い声で誰か唄つたと思つたら「はい忘れた」と言つてやめて皆を笑わせた。それから大黒舞があつた。鳥打ち帽を後ろ前に被つてドロップの缶に石ころを入れ中程を手拭で結んだのを振りまわして「舞い込んだ／＼」と言つて出て来た。それがすむと、その人は缶と帽子を取つて手拭いをかぶつて手おどりをやつた。誰かが「大黒様も中々の芸者だなあ」と言つた。其の次は、入山のお母さんと泉田のお母さんで編み笠を持つて敷居に手をついて「私達は声が悪くて駄目ですから、蓄音機に唄つてもらひます」と言つた。其の時神主さんのお母さんが電氣の球を持つて来てはめた。座敷の中は球にぱつと明るくなつた。気が付いて外の方を見たら後ろの葡萄棚が真つ黒くかぶさる様になつて、あたりがうすばんやり暗くなつてゐたので、出たら少し雨が降つてゐた。<sup>(4)</sup>つまり、この綴方は、農村の祭りの日の解放された雰囲気が出されてゐる。作者の目の正確さ、それでいて愛情深く人間を見ている豊かな心に感動させられるであろう。冒頭の文章、『只今』と言つたら、母が茶の間で針仕事をしてゐながら『千代、今日ね、お宮に婆さん達の踊りあるから子供達連れて見によこせつて、祖母ちゃんと言つて行つたよ』は、その場の会話を使いながら、家庭の持つ暖かい雰囲気までも目に浮かぶように描写されている。これも木村文助の指導である。全体的には、農村の祭りの日に解放された人々の心が表現される。日常生活では農業で苦勞する代わりに、祭りではその苦しさや悲しさを吹き飛ばすような行動に出ることは理解できる。

木村文助の教師としての度量の大きさを示す次の綴り方を提示し、

検討する。

## 夜遊

今月九日の晩は早く寝ようと思つておもつて居た所へ、五六人の友達が口笛を吹いて呼んだ。俺は寝やうと思つて帯を取つてはだかつて居た所であつたから面白紛れにをいと起つ拍子にお爺さんに煙管でパンとやられた。俺は、「痛い」と言つたら「うちけて歩くからそだ」と婆さんに笑はれ、友達も外できて居てあはくと笑つた。それで外へどん／＼行つたら、中からお婆さんが、「晋、来るから来い」と言つたが、「誰が、いらねで」と言つたら、お婆さんは「それだんて、爺様に叩かれんだ」又友達の中の一人は連れて行きたがつて「あんだ婆『糞喰へ』言つてあべあ」と言つたが、私も朋友の晋来たのであるから直ぐに返ろうとしたら友達は「んだら又後から来い」といつて行つた。

家へ歸つて来たが晋は来ないで俺ばかりいきなり、お父さんに叱られて居る所へやつと晋は来たが、面白くないもんだから、むつつりと構へて、何とも音がない。お婆さんは「あら、晋来たもの、上がれてさないがせ」と言つたから「糞喰へ、馬鹿婆」と言つたら、又お父さんに「此の餓鬼でんぼでやじあねえ、腰ほね折れたぎやなば利がない」と言つた。私は心の中で、「鯰」と言つて居るけれども口に出して言ふ事が出来ない。晋は帰らうとしたが、皆で漸くの事で連れて上げた。「何もないが支度が出来たから、晋来いであ」と言つて一ぱい酒を注いだら、晋は、「あゝうまい」と言つて四五杯

もやつた。私は好きでないから二杯やうやく呑んだ。お婆さんに「肴いくせだあ」と言つたら、「汝ばかり食つてないで、晋さまも食はせないがせ」と言つて、持つて来てよこした。それから、私は小便する振りして友達の遊んで居る所へ出かけた。「来たであ」と言つたら、「を、うまい」と言つたから戸を開けて入つた。「今、汝達叫んだけ外さ来たば、をもしが怒られたであ」といつたら友達はあはくと笑つた。「馬鹿臭いから林檎の一つも買つて食べえ」と言つたら、「酒だら一番よい」と言ふ人はあつた。それで酒にすると言つたけれども、「酒にすると銭がかかるから、林檎にすべ」と言つた。「んだら、何程出してか」と言つたら、「十銭出しさ」と言つた。そこで十銭づゝ出した。七八十銭値も買つたから、どんな林檎食ひでも大丈夫であつた。林檎を食ひ家に歸つたら三時頃であつた。寝やうと思つて帯を解いたら爺さんも婆さんも声をそろへて「俺家の武夫は、でんぼでやじあない、千澤さでも預らけ」と言ふ声は聞いたけれども其儘眠つてしまつた。朝起きて見るとお父さんは「此処へ座れ」と言つた。私は心の中で「昨夕行つたやつか」と思つて居る中「学校行け」とお爺さんが寢処で言つたから、私は御飯を食へ友達と一緒に学校へ来た。(原作を読める程度に訂正とある。)

この綴方について、文助は次のように述べる。

私はかうした野生其の儘の生活を勿論是認はしなかつたが、叱りもしなかつた。先づ親しむことから始めねばならぬと考へたからである。乗すべき純なものがある。且本人には解つてゐると考へえら

れる節がある。夫よりも、今迄自分始め教師達が、此天真な性情に全然目を背け、単に外面的温順を強要してきたのは正しかったかどうか、深く反省させられた。かうして此子の生活の内面を知ると同時に、さながら白眼を以て敵視し来つた私は、親友の如き取り扱いをなす様になり、彼の性格も又一変したのであつた。程度の差はあつてもかうした実例に次第に接するに至つた。

茲で、私は計らずも、当時あつた或一光景を想起せざるを得ない。夫は放課後、掃除がすみ、カーテンが引かれた或教室の一隅で、三四の児童が盛んにじやん拳をしてるので、私は遇番としてその喧騒を戒め、何の為にじやん拳をやつてるのかを尋ねた。が、彼等は笑つて答へなかつた。夫から私は職員室に帰ると、間もなく今の児童の一人が、受け持ち教師の卓前にやつて来た。「先生、掃除出来た」といふと、その先生は徐に眼鏡を挙げて、はつたと其児童を睨み付け「馬鹿、そんなひ様があるか!」と叫んだものである。児童は小さくなつて「掃除が出来ました」といひ直した。が、「駄目だ、帰れ」と突帰した。児童は少し時を置いて又入つて来て、前の如く繰返した。と、「こら、そんな態度でいかん。職員室に入ったら第一に礼をするんだ、夫から先生の前に来たら、止まって姿勢を正して『掃除が出来ました』といふのだ。いくら平素といつても解らん奴だ。その帯も締め態は何だ。も「一度やり直せ」——又帰つた。戸の外には、安否を案じて待受けてゐたであらう、他の児童達の気色がした。此時正面に新聞を見てゐた校長が「此辺の奴等（といつた）詞悪くてな」と、如何にも此教師をとりなすかにいつたが、

其の先生は反つて自分の努力の足らぬを恐縮した様に「平生に喧しくいふんですけれども、どうも……」と申訳するのであつた。茲で私はじやん拳の理由がはつきりと解つたのである。（負けたものが恐らく先生に届けに行く番である。それほど教師は近づくべからざる存在であつた）そして私の臉は自ら熱くなるのであつた。<sup>(15)</sup>

つまり、この文助の表現から生活綴方教師としての資質を十二分に備えていることである。子どもに妥協することなく、子どもに要求し続ける文助の教育精神が窺われるであらう。われわれ教師が今日問題にする不良児の扱いも堂に入つたものである。

文助は、「不良児」について次のように述べる。

……劣等生で手の付けられない乱暴者、学校は大嫌ひ、部落の不良児を集めては川に行つて船を漕いだり、山に行つてグミを取ったりして遊び廻り、弁当を喰べて、午後下校頃児童と一緒に帰るといふ手のつけられない放浪性を帯びたものがあつた。（中略）「お前のやり方は乱暴だが、あの綴方は正直に書かれてるので面白かつた。もつと書いて来ないか」といふと、早速翌日五枚ばかりのものを持つて来た。これも亦驚くべき乱暴生活を露骨に書いたものであつた。それから矢継ぎ早に数編出した。<sup>(16)</sup>

文助の子どもの機微に触れた教育力を發揮していることである。不良児と言われている子ども達は相手の表情から気持ちを鋭く読みとる能力には優れている。出来る子ども、出来ない子どもの区別なく、ど

の子どもをも平等に扱う教師であれば、子どもは胸襟を開いてくれるのは当然である。

ここで、木村文助の綴方実践の特色として指摘したいのは、教師と子どもが共に生活している場所としての「村」に拘り続けていることである。

文助は郷土である「村」を重視する意味・価値について次のように述べる。

吾々は今更、此失敗を繰返さうとするものではない。吾々の意味するものは現在及び将来、共に、本当に役に立つ教育で、短時間に一躍、大人を作らうなど、いふ無理はしない。彼等の現実たる郷土を先づ基礎として学び、之を理解し十分生活させる事によつて延いて将来の活動に及ぼさうとするものである。人間生活の重点は興味となつて全力がその先端に集中發揮され、そこから無限に伸びて行くものである。従つて興味を有ち得ない時停滯があるのみである。そしてさうした興味を有ち、関心を有するものは其直接生活の場所である郷土である筈である。それで、こゝから出発せようとするのである。郷土は社会の単位であり縮図である。一般文化は児童の経験を離れ生活から遠つた存在であるが、郷土を通ず時始めて理解が得られるのである。

だが、これだけの意味では無意識であつたのを喚起し、心理上の主張を高調しただけで、従来とさしたる変わりはないが、吾々は更に意識的に目的をそこに置かうとするので、そこが著しく違ふので

ある。私は更に其上に郷土の繁栄社会改造、一身一家の幸福をめざした経綸的基礎を築くものでなければ完くしないと信ずるのである。<sup>(1)</sup>つまり郷土は出発点であり、同時に目的であるとなすのである。

ここで文助の主張することは、郷土(村)をとことん理解し、郷土を發展させる人材を作る、つまり村を育てる教育を究極の目標とすることである。

## おわりに

大正七年七月三十一日、北海道亀田郡大野尋常高等小学校訓導兼校長として綴方を中核に据えての実践に奔走する。昭和三年六月六日突如、茅部郡砂原尋常高等小学校訓導兼校長・砂原青年訓練所主事として転任する。その間約十年、多くの実績を残す。青年団の指導もその一つである。大正八年十一月十四日、大野農業補習学校訓導兼校長に任命される。その学則には、「本校ハ農業ニ従事シ又ハ従事セントスルモノニ農業ニ関スル知識技能ヲ授クルト共ニ国民生活ニ必要ナル教育ヲ為スヲ以テ目的トス」とある。当時の『大野村史』を繙けば、『若者達ハ多クハ夜遊ビヲナシ風俗ヲ破壊セルガ、各青年会設置以来大イニ面目ヲ改メタリ』と書かれているので、木村文助の功績の結果であると思われる。つまり、文助は村を育てる、つまり、郷土を知り、郷土愛を涵養し、郷土に残る教育に志したいことは評価していいであろう。青年教育の拠点、「十月会」の会館も設立される。

また、昭和九年砂原小学校の高等科の児童共同作『漁村職業の全貌』文集編集・発行する。調べる綴方実践の優れた、つまり、親の職

業の内実を研究しつつ、生活の向上を目指す実践の高さをも示す。今後、この研究を深めることは是非とも必要である。

この研究を進めるに当たって、大野町教育委員会社会教育課、町史編集係長 八木橋 直弘氏、大野町文化財保護研究会会長木下寿実夫氏には資料、ご教示に与ったことを報告させて頂いて感謝の意を表する。

今回は、木村文助の綴方指導を具体的に大野小学校の子どもたちの綴方作品を中心に、子どもの側から論じたものである。

なお、この研究は、「佛教大学平成十四年度特別研究助成」によってなされたものである。記して感謝の意を表したい。

〔注〕

- (1) 畠山義郎『村の綴り方——木村文助の生涯——』(無明舎出版 二〇〇一年七月)二二―三三頁。
- (2) 木村文助編著『村の子供』(文園社 一九二七年四月)一―二頁。  
ちなみにこの著書には、「赤い鳥」主幹 鈴木三重吉先生序、東京高等師範附属小学校 田中豊太郎先生序、北海道大野小学校長 木村文助編著と表紙に書かれる。
- (3) 前掲書 三頁。
- (4) 前掲書 三―四頁。
- (5) 中内敏夫『生活綴方〈増補版〉』(国土新書 一九八二年七月三三―三三頁)。
- (6) 日本作文の会編『講座・生活綴方 1 生活綴方概論』(百合出版 一九七八年七月)二七三頁。
- (7) 注(3)四―五頁。
- (8) 木村文助『悩みの終身』(厚生閣書店 昭和七年五月十五日発刊)

二頁。

- (9) 木村文助『悩みの終身』(厚生閣書店 昭和七年五月十五日発行)一―二頁。「第一章 悩みの本体」の冒頭の文章である。
- (10) 木村文助著・鈴木三重吉序『村の綴り方』(厚生閣書店 昭和四年十二月十五日)三五―三七頁。
- (11) 峰地光重著『綴方教育発達史』(啓文舎 昭和十四年六月十五日発行)この著書は、峰地光重著作集刊行委員会によって『峰地光重著作集 13』(けやき書房 一九八一年七月)を使用している。
- (12) 前掲書 一五七―一五八頁。
- (13) 木村不二男「父と子の作文小史——作文の本質を求めつつ——」(雑誌実践国語 昭和三十三年八月一日発行 第十九号 第二一四号)不二男氏が、父文助のことを回想して数回にわたって纏めたものであり、文助を研究場合の参考資料として貴重である。
- (14) 木村文助著・鈴木三重吉序『村の綴り方』(厚生閣書店 昭和四年十二月十五日発行)三八―四二頁。
- (15) 前掲書 一一―一四頁。
- (16) 前掲書 九―十頁。
- (17) 前掲書 一三九頁。このことは、雑誌「北海道教育」昭和六年七月号、八月号に「村の教育——生産発展の教育論——」として詳細に述べ、雑誌「北海教育詳論」(昭和十二年)一月号にも「教育目標の一つの転向——つぶしの利く教育」論として、農村の教育のあり方を論じる。

(おかや あきお 教育学科)

二〇〇二年十月十六日受理